

「思いやり・親切」を扱う道徳読み物資料に 関する一考察

池田 直美 ・ 植田 和也*
(高松市立栗林小学校) (附属教職支援開発センター)

760-0073 高松市栗林町2-10-7 高松市立栗林小学校
*760-8522 高松市幸町1-1 香川大学教育学部

A Consideration about the Morality Something to read Material which handles “Consideration and Favor”

Ikeda Naomi and Ueta Kazuya*

Ritsurin Elementary School, 2-10-7 Ritsurin-cho, Takamatsu 760-0073

*Faculty of Education, Kagawa University, 1-1 Saiwai-cho, Takamatsu 760-8522

要旨 本稿では、小学校の学習指導要領における道徳の内容項目「思いやり・親切」に関して、各教科書会社の副読本における掲載数や主人公、ストーリー上の場面構成等に関する学年間の違いや各社の特徴を比較検討した。そのうえで、「思いやり・親切」を扱う道徳読み物資料に関して、各学年の発達段階にふさわしい資料の特徴について検討した。今後の教科化に向けて、資料の分析やよりよい選定の視点としていきたいと考える。

キーワード 道徳読み物資料 思いやり・親切 教科書会社 発達段階 資料の特徴

はじめに

「特別の教科 道徳」としての方向性が示されて、平成27年3月に学習指導要領が改正され、今後は教科化に向けての道徳の教科書の問題が大きな課題の一つである。教科としての道徳科の授業実施には、授業で扱う教科書が必要であり、教科ではない今までは副読本としての各教科書会社等の読み物資料を選定して実施されてきた。

今後、小学校においては平成30年度からの全面実施での教科化に向けて、授業の充実を図る観点からも資料の分析やよりよい選定は重要な問題であり、授業の質を高めるためにも教師に

そのような資料分析や教材研究の力量が一層求められる。

そこで、本稿では、過去のいくつかの調査等でも最も重視する内容項目として報告されている「思いやり・親切」に関する資料の分析を行い、低・中・高学年毎の資料の特徴を明らかにしたいと考える。

1 先行研究等から

読み物資料や道徳の内容項目に関連する先行研究として、東京学芸大学・総合的道德教育プログラム「道徳教育に関する小・中学校の教員を対象とした調査」(H24.2)によると、「効果

的だと思われた資料」の中において、2(2)「思いやり・親切」の内容をねらいとする資料が上位を占めたことが報告されている¹⁾。また、「重視したい道徳の内容項目」でも、「思いやり・親切」が最も多く、一般教師、道徳担当教師ともに約80%の教員が選んでいる²⁾。また、大学生が重視する内容項目に関しては、柄本(2014)が行った調査において、2(2)「思いやり・親切」が最も高い順位であった。

このような結果の考察において、柄本(2014)³⁾は、「学校教育においても重視されやすく、一般成人でも考え方や生き方において大切にされやすい」ことと「項目の重視度が共有されているため、保護者等と道徳教育の連携が比較的円滑に行われやすい」ことを指摘している。

思いやりを育む実践プログラムに関しても松岡(2004, 2006)など、学会等でも報告されている。また、アイゼンバーグの共感性や思いやりに関する研究も菊池(1988)、佐藤(1985)他においても報告されている。さらに、アイゼンバーグの考えを基盤に、児童の道徳性の発達段階に応じた資料の条件に関する研究として、七條(1985)が大変参考になり、児童の発達段階と資料の条件や活用において多くの示唆を得ることができる。資料における主人公等に関する研究としては、森岡(1988)が、資料に描かれた主人公の道徳性をノーマン・J・ブルの四段階説に基づいて、子ども、擬人、大人の分類ごとに行っている。

一方、植田・七條(2014)⁴⁾は、副読本への掲載数が3資料以上の内容項目には、学年ごとに違いがあることを指摘している。低学年では1-(1)が最も多く、続いて3-(1)、2-(2)、4-(1)である。中学年では、2-(3)が最も多く、続いて4-(1)、1-(1)、3-(1)、2-(2)である。高学年では、3-(1)が最も多く、4-(1)、4-(8)が続く。いずれも、「発達段階に応じた結果」としているが、低・中学年では、他の内容項目と比較して、2-(2)「思いやり・親切」への比重が大きいことが分かる。

だが、これらの先行研究でも各教科書会社の副読本における「思いやり・親切」を扱う読み物資料の学年間の比較や検討から特徴を整理する等の基礎研究は筆者が知る限りでは見ることができない。

2 「思いやり・親切」をねらいとする読み物資料の分析

(1) 目的

道徳の時間の資料となる魅力的な教材を多様開発することや、効果的に活用することが求められているが⁵⁾、各学年の発達段階にふさわしい資料の特徴については、漠然とした理解にとどまっている。また、先行研究でも触れたように、各教科書会社の副読本に掲載されている読み物資料を比較検討しているものもみられない。そこで、本調査においては、小学校用として刊行された複数の道徳副読本をもとに、内容項目2-(2)「思いやり・親切」に関する各学年の読み物資料を分析し、児童の「思いやり行動」の発達を踏まえた資料の特徴を明らかにすることを目的とする。そのことが、今後の資料選定や分析のポイントを探るためのヒントとなることを願っている。

(2) 方法(分析の視点)

まず、各教科書会社の「思いやり・親切」に関する各学年の掲載数を整理して比較する。次に、各読み物資料で描かれている登場人物について、「主人公(動物・子ども・大人)」、「思いやりや親切な行為の対象」をタイプ別に分析する。また、ストーリー上の登場人物の人間関係や親切をする側、される側等の場面構成等などに関する学年間の違いや各社の特徴を比較検討する。その際、主人公との関係性の強弱や設定、資料中の思いやりある親切な行為が中心として描かれている場面設定や、資料に描かれている結末部分等についても可能な限り比較していく。

それらの観点を踏まえて、「思いやり・親切」を扱う道徳読み物資料に関して、各学年の発達段階による資料の特徴を明らかにしていき

い。

(3) 各教科書会社の比較から

各教科書会社(平成25年度版)で2-(2)「思いやり・親切」を扱う内容として掲載されている読み物資料数、主人公と「思いやり・親切」の対象の分類を行う。

まず、小学校学習指導要領に示されている内容項目数としては、低学年が16、中学年が18、高学年が22である。教科書会社の資料掲載総数は、各社とも1年生で34、2年生以上で35となっている。つまり、低学年では各16の内容項目に関して2資料ずつ掲載することが数字上では可能で有り、高学年では22の内容項目の約半数程度が2資料ずつ掲載可能とみることができる。

①「思いやり・親切」掲載数の比較

教科書会社5社⁶⁾(以下、A、B、C、D、Eとする。)の平成25年度版小学校道徳副読本で2-(2)「思いやり・親切」の内容をねらいとして掲載されている資料掲載数は表1の通りである。5社の間に多少のばらつきはあるが、C社の6年生以外では、全て2、または3と複数の資料が掲載されている。特に、中学年までは、3編掲載している教科書会社が多く、1年～3年で3社、4年で2社にみられる。この中には、ストーリー仕立てではないコラム的な内容等も含まれているが、「思いやり・親切」への注目の高さを強く感じるものである。これらの表1で示した70資料を全て読み、さらに分析していく。

表1 「思いやり・親切」として掲載されている資料掲載数

| 掲載数 | A | B | C | D | E | 合計数 |
|-----|----|----|----|----|----|-----|
| 1年 | 2 | 2 | 3 | 3 | 3 | 13 |
| 2年 | 3 | 2 | 2 | 3 | 3 | 13 |
| 3年 | 2 | 3 | 2 | 3 | 3 | 13 |
| 4年 | 3 | 2 | 2 | 2 | 3 | 12 |
| 5年 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 10 |
| 6年 | 2 | 2 | 1 | 2 | 2 | 9 |
| 合計数 | 14 | 13 | 12 | 15 | 16 | 70 |

②主人公について

低学年では、「子ども」が14編(1年:5, 2年:9), 「動物」が10編(1年:7, 2年:3)で、1社の1作品だけが、「おばあさん」が主人公として描かれていた。ただし、5社中4社で「はしの上のおおかみ」が掲載されており、表現に多少の違いはあるが、あらずじとしては同様であった^{*1}。学年ごとにみると、1年生では、「動物」が主人公として描かれているものが7作品と最も多く、2年生では、「子ども」が9作品と動物を大きく上回っている。中学年では、動物は見られなくなり、「子ども」が最も多く、3年生では全てを占めており、4年生でも、唯一「大人」を主人公とする資料が1編あるのみである^{*2}。

表2 主人公のタイプ別掲載数

| | 動物 | 子ども | 大人 |
|----|----|-----|----|
| 1年 | 7 | 5 | 0 |
| 2年 | 3 | 9 | 1 |
| 3年 | 0 | 11 | 0 |
| 4年 | 0 | 11 | 1 |
| 5年 | 0 | 7 | 2 |
| 6年 | 0 | 6 | 1 |

さらに、高学年になると、ほとんどが「子ども」ではあるが、「大人」を主人公として描かれたものも見られる。つまり、中・高学年ともに、「動物」は描かれていない。

低学年において、「動物」を主人公とする資料が多く、学年が上がるにつれて「子ども」「大人」の割合が大きくなっている理由としては、低学年の児童が、動物への親しみを強く持っていることや動物を擬人化して描くことで、共感的に自我関与しやすいことが推察される。

③ 思いやり・親切にする対象について

次に、主人公が親切にする対象や、思いやり気付くきっかけをもたらした対象をまとめた結果が、表3である。こちらも、学年ごとの特徴が見受けられる。

例えば、低学年では、動物が親切な行為の対象となる動物同士の設定が多いが、年下の見知

表3 対象のタイプ別掲載数

| | 動物 | 子ども | | | 子ども 小計 | 大人 | | | | | 大人 小計 |
|----|----|-----------------|-----|-----------------|-----------|----|------------|-----------|--------------|-------------|----------|
| | | 妹・弟 年下の 子 | 同級生 | 姉・兄 年上の 子 | | 父母 | 知っている 人 | 知らない 人 | 高齢者 知っている | 高齢者 知らない | |
| 1年 | 7 | 4 | 0 | 0 | 4 | 1 | 0 | 0 | 1 | 1 | 3 |
| 2年 | 3 | 3 | 3 | 1 | 7 | 1 | 0 | 1 | 1 | 0 | 3 |
| 3年 | 0 | 1 | 2 | 2 | 5 | 0 | 1 | 2 | 2 | 1 | 6 |
| 4年 | 1 | 1 | 5 | 0 | 6 | 0 | 0 | 4 | 0 | 4 | 8 |
| 5年 | 0 | 0 | 4 | 1 | 5 | 0 | 2 | 1 | 0 | 1 | 4 |
| 6年 | 0 | 0 | 3 | 1 | 4 | 2 | 0 | 0 | 0 | 3 | 5 |

らぬ子どもや妹など、幼い人を対象として描かれることも7作品と多い。これは、学習指導要領の内容項目に示されている「幼い人や高齢者など身近にいる人」⁷⁾を意図したものと考えられ、実態に即している。

中学年では、身近な人を越えて、偶然出会った見知らぬ人、直接顔を合わすことのない人など、自分との関係性が弱い相手にまで、その対象が広がっていることが分かる。また、高齢者や体の不自由な人、動物など、自分の立場とかけ離れているがゆえに、相手の状況や真意を理解することが難しい内容も含まれている。これは、学習指導要領の内容項目に示されているように、中学年が「相手の気持ちをより深く理解できるようになる」⁸⁾ことを踏まえたものであろう。当然であるが、行動範囲の広がりや学校内外での多様な役割経験等から、思いやりの行為の対象に広がりが見られて、「高齢者」や「自分よりも幼い子」「見知らぬ第三者」等、多様な対象への行動を実際に起こしやすいことも考えられる。

高学年においては、中学年同様、対象の多様性が見られるが、主人公と対象の対一対一のかかわりだけでなく、その場にいる周囲の人間への「思いやり・親切」も含む描き方になっていることが特徴的である。これは、学習指導要領で示された「人間関係の深さの違いや意見の相違などを乗り越え、思いやりの心とそれが伴った

親切な行為を、児童が接するすべての人に上げていく」⁹⁾こととつながっている。高学年の児童は、自分との関係性よりも相手の困り感、痛みの強いものへの意識が強いものの、仲間集団との関係性が行動を大きく左右し、行動が出にくいという実態も見受けられる。つまり、周囲との関係性に配慮しながらも、対象となる相手の立場に立ち、相手のためになるのかをよく考えた言動が実践できるように考えられる登場人物や資料の構成になっているものが多い。

④ 場面設定や構成について

低学年の資料では、主人公が思いやり行動の主体となる描き方が多く、主人公が第三者として客観的に行為を見届けるものは少ない。その代表的な資料として、定番資料として活用されている「はしのうえのおおかみ」をみると、B社以外の4社に掲載されている。まさに、低学年で「思いやり・親切」を扱う際の代表例といえよう。資料の概要は次の通りである。いつも橋の上で通せんぼをしていた「おおかみ」が、「くま」に親切にされて、やさしさを受け取り、今度は「うさぎたち」に親切にすることで感謝され、自分もあたたかい気持ちになるという結末である。この資料は、行為を「してもらう」側、「する」側のどちらも含んでおり、1年生が「おおかみ」の立場になって、「思いやり・親切」の大切さを共感的に考え、感じ取るのにふさわしいものと言えよう。

| | | | | |
|-----------|--|----------------|--|---|
| はしの上のおおかみ | いじわるやわがままをしないで、身近にいる弱い人に親切にしようとする心情を育てる。 | おおかみ うさぎ・くま | | <p>文 学</p> <p>●一本橋を渡ろうと、おおかみは、うさぎたちに対して、いばった様子で追い返してしまう。ある日、おおかみは橋を渡ろうとすると大きなくまを見つけ、あわてて引き返そうとするが、くまは、おおかみを抱き上げ、後ろにそっと下ろしてやった。おおかみは、くまの後ろ姿を見て考える。つぎの日、再び橋の上でうさぎに出会ったおおかみは、うさぎを優しく呼び止める。</p> <p>◎優しくされるとうれしい。誰に対しても優しくすると、自分もいい気持ちになる。そして、優しさは広がる。</p> |
|-----------|--|----------------|--|---|

図1 「はしのうえのおおかみ」の場面設定に関する分析図

| | | | | |
|------|--|---------------|--|---|
| さんぼ道 | 幼い人や困っている人など、身近にいる人に思いやりの心を持ち、親切にしようとする心情を育てる。 | わたし(子ども) 弟 | | <p>道徳資料として作られたもの</p> <p>●「わたし」は、雨上がりに家族で公園に行く。散歩道は雨のせいで歩きにくく、弟は遅れがちになる。アスレチックが楽しみな「わたし」は、弟を置いて先に進んだが、少し考え、弟のところに戻って手をつなぎ、いっしょに歩いていくことにする。</p> <p>◎自分よりも幼い相手に対して、優しい気持ちで心配したり励ましたりすると、相手も周囲の人も温かい気持ちになる。</p> |
|------|--|---------------|--|---|

図2 「さんぼ道」の場面設定に関する分析図

つまり、本資料にみられるように、低学年では、行為の相手ではなく、自分の視点に立った「思いやり・親切」であり、それこそが児童の発達の実態に沿った描き方だと言える。

また、表3に示したように思いやり・親切にする対象として、低学年で最も多くあげられているのが、自分より年下の弟・妹・幼い相手や、動物でも弱い立場の相手である資料が多い。図2に示す2年A社の「さんぼ道」では、主人公の「わたし」と弟との関係である。さらに、弟に対して思いやりのある行為に大人からのプラス評価が色濃く描かれた資料である。大人への従順傾向が強い低学年の児童にとって、主人公が両親からの称賛に喜ぶ最後の場面は、心に訴えかけるものがあるだろう。

中学年の資料では、親切な行為をした後の結

末の描き方が異なっている。前述のように、行為の対象が多様に広がるのだが、その相手から受け入れられないという場面も含まれる。例えば、「相手への思いは受け入れられるが行為は断られる場面」や「行為が負担に感じられて受け入れられない場面」などである。

4年A社に掲載されている図3「心と心のあく手」が、前者の一例である。主人公の「はやと」は、見知らぬおばあさんの荷物を持つと声をかけるが、断られる。母親から、おばあさんの事情を聞くことで、おばあさんの本当の気持ちに気づき、数日後に再会した時には、心の中で応援しながら、そっと後ろを歩く。この場合、「荷物を持つ」という行為は、相手のためにならず、「そっと後ろから歩く」ことで、相手の真意に沿うことになる。つまり、独りよが

| | | | | |
|---------|------------------------------------|----------------------|--|--|
| 心と心のあく手 | 相手の立場や気持ちを理解して、進んで親切にしようとする心情を育てる。 | ぼく(子ども) 見知らぬおばあさん | | <p>●「ぼく」は、重そうな荷物を持って歩いているおばあさんが転びそうになるのを見かけ、「荷物、持ちます」と声をかけるが、断られる。母からは、いいことをしたと認められ、そのおばあさんの足が不自由なこと、歩く練習をすることで快復してきていることも聞く。数日後、おばあさんに再会し、心の中で応援しながら、そっとその後ろを歩く。おばあさんにお礼を言われ、ぼくの心も明るくなる。</p> <p>◎相手の本当の気持ちを考え、相手のためになることをしてこそ、相手に受け入れられる親切な行為になる。</p> |
|---------|------------------------------------|----------------------|--|--|

図3 「心と心のあく手」資料分析図

| | | | | |
|---------|--------------------------------------|---------------------------------|--|---|
| もう一つの親切 | (相手や周囲の人の気持ちを考えて、よりよい親切な行動の在り方を考える。) | ぼく(子ども) 見知らぬおばあさん・友達・見知らぬ女の子 | | <p>●友達と二人でバスに乗った「ぼく」は、おばあさんに自分の席を譲ったが、同じように気にかけていた友達に対して悪い気がした。数日後、電車の中で、別のおばあさんが立っているのを見かけ、席を譲ろうと考えていると、右隣に座っていた中学生が立ち、ぼくと左にいた女性に「席を一つずつ寄ってください」と言って、ぼくたちにお礼を言った後、おばあさんを一番左の席に案内した。おばあさんは、3人にお礼を言って座った。</p> <p>◎親切な行為を受けた側や周囲の人たちが、罪悪感や居心地の悪さを感じないように計らうことで自己満足に陥らない真の親切になる。</p> |
|---------|--------------------------------------|---------------------------------|--|---|

図4 「もう一つの親切」資料分析図

りの「思い込み」ではなく、相手の立場に立った「思いやり」の心があってこそ、親切な行為であると言える。これは、学習指導要領の内容項目で示された「相手に対する思いやりの心を育てること」¹⁰⁾を踏まえた内容であろう。

さらに、高学年の資料では、人間関係が中学年に比べると、より複雑に描かれている。主人公や集団の葛藤、変容を描いたり、複数の人物の行動を比較する構成がほとんどである。主人公、行為の対象といった当事者のほか、周囲の人も含めて一般的に捉えさせる設定も見られる。例えば、6年C社の「もう一つの親切」は、

友達と二人でバスに乗った「ぼく」が、おばあさんに席を譲ったが、同じようにおばあさんのことを気にかけていたものの、立ち遅れた友達に対して、申し訳なさを感じてしまう。数日後、電車に乗った「ぼく」は、別のおばあさんに自分の席を譲ろうと考えていたところ、右隣に座っていた中学生が立ち、「ぼく」と左にいた女性に「席を一つずつ寄ってください。」と言って、おばあさんを席に案内し、自分の行いを振り返るという話だ。この資料は、親切な行為を受けた側や周囲の人たちが、罪悪感や居心地の悪さを感じないように計らうことで、自己

満足に陥らない真の親切になることを伝えている。

3 考察

(1) 低・中・高学年による資料の特徴一場面の設定や構成の違い

前述のように、低学年の資料の特徴としては、主人公が親切な行為の主体となる出来事や場面の設定が多く、主人公が第三者として客観的に行為を見届けるものは少ない。それは、ストーリーとして、子どもたちが当事者として感情移入し、共感しやすい状況において、思いやりや親切な行為の意義に気付かせるものが多い。

言い換えれば、親切な行為をしてもらおうと、「うれしい」「安心する」「元気が出る」といった快感情が引き起こされるものや、逆に、親切な行為をすると、大人からの賞賛や相手からの感謝などを体験することで良い気持ちになるといった、他者からの見返り（プラス評価）が保障される形で描かれることが多い。つまり、「相手のことを考えて親切な行為をすれば、良い気持ちになる」ことや「逆に親切な行為を受けるとうれしかったり、気持ちがよかったりすることに気付く」といったことが、分かりやすく描かれている。結末も主人公が快の感情を抱き、プラスのイメージで終えているものが殆どである。

これは、どちらかと言えば自己中心性の強い低学年の児童が、登場人物に感情移入し、共感的に捉えることができるように、そのような利己的な場面を意図的に設定したものと考えられ、低学年の資料に見られる特徴である。

中学年では、低学年になかった設定として、相手への思いは受け入れられるが親切な行為は断られる場面や親切な行為が負担に感じられて受け入れられない内容も描かれている。

これは低学年との大きな違いであり、児童の発達段階を考慮したものである。さらに、「独りよがりの思いやりがあることを知ることから、相手の立場に立った本当の思いやり」に

ついて考えようとする内容も見られた。これらは、低学年とは明確に違って描かれている特徴である。

また、友だちのよいところに目を向けて、ともに歩もうとする大切さについても、多く扱われている。これは、友達との関係性が深まる中学年段階において、健康的な仲間集団を育成することを意図している中学年における資料の特徴であると思われる。

高学年では、何よりも人間関係が中学年よりも、複雑で多様な関係として描かれており、周囲の人も含めて一般的に捉えさせる設定も見られる。そのような関係の中で、「思いやりとは、どうあるべきか」といった価値そのものもつ本質的な部分を考えさせられる場面が多く見られた。例えば、「相手に対する思いやりを第三者の視点から」考えさせる内容や「親切な行為が相手に受け入れられるためには、何が大切なのか」を他者との関係の中において考えさせられる内容、「本当の思いやりとは、受けた相手が重荷に感じないようにさりげなく行われるべきである」点を示唆する内容等も見られる。

つまり、高学年では、人とのかかわりの中にある現実的な難しさ、換言すれば、臆病さや無関心、気まずさといった人間の弱さや醜さも踏まえ、自己犠牲や葛藤を乗り越えて行動する場面を描くことで、思いやりのある親切な行動のすばらしさを伝えるとともに、「思いやりとは、どうあるべきか」を問う内容になっている（文末省略）。それは、例えば、「受けた相手が重荷に感じないようにさりげなく」「自然に堂々と」「当たり前のように」「横並びの関係から」「笑顔で」といった事柄であり、そこから、思いやりの本質を捉えてほしいといった願いが資料に込められていると考えることができる。

(2) 現実の問題や実在の人物の扱い

読み物資料の比較による低・中・高学年の資料の特徴については、前述したとおりであるが、「思いやり・親切」を扱う内容の違いにも次のような点が指摘できる。

まず、現実の問題や実在した人物の扱いである。低学年から中学年までは道徳資料として作

られたものが多かったのに対して、学年が上がるに伴い、ノンフィクション、児童作文、エッセイといった類型のものが増え、より現実の問題として実際に社会で起きていることにも目を向けることや、実在した（している）人物を取り上げて生き方のモデルとして描かれている資料もみられた。例えば、5年E社の『『おとちゃんルール』は『あたりまえ』のルール』は、身体的な障がいを持っている筆者のエッセイである。自分が相手の上に立って差し伸べるのではなく、横並びの関係性の中で相手への理解を深め、相手のためになることを考え、実践することが本当の親切であると伝えている。

このような傾向は、読み物資料だけでなく、NHK放送番組の映像教材にも見られる。NHKの道徳に関する小学校高学年向け番組の「道徳ドキュメント」では、「ドキュメントを通して、実際に起こった出来事や人生体験を取り上げ、現実の問題と向き合いながら道徳を考えます。番組を見た後で、教室や家庭で話し合うきっかけを与えます。中学校の道徳の授業にもご利用いただけます。」¹¹⁾と紹介されている。

前述の学年による資料の特徴や児童の発達段階を踏まえた上で、扱っている内容が現実の問題や実在の人物であれば、児童の興味関心は高まるかもしれない。しかし、重要なことは、ねらいとする内容項目を扱う資料においてどのように取り上げ、発達段階を考慮しながら、どのように迫るべきかを検討していくことであろう。

（3）資料の特徴を授業に生かすために

道徳の時間には、学習指導要領で示された内容項目を踏まえた上で、目の前の児童の実態と照らし合わせながら、読み物資料の選定、分析を行い、実践にあたることが重要である。その際、「他律から自律へ」「結果を重視する見方から動機をも重視する見方へ」「主観的な見方から客観性を重視した見方へ」「一面的な見方から多面的な見方へ」¹¹⁾と発達していく児童の道徳性の発達の捉えをもとに、中心価値への迫り方を熟考することが大切であろう。「思いやり・親切」の内容に迫る時、児童の道徳性の発達段

階を考慮すると、各発達段階における資料の特徴を生かして次のような視点をもって各学年の指導にあたりたい。

低学年では、ストーリー中の状況や場面に浸りながら、共感的に登場人物の心情を理解することで「思いやり・親切」のよさに気づけるようにしたい。特に、自分よりも幼い相手を対象とする親切な行為については、体験的な活動と関連付けながら実感を伴う理解を図りたい。そのためにも、他教科や児童の生活体験を資料内容やねらいと照らし合わせながら事前に単元計画や事前・事後指導として検討しておくことも、資料をより効果的に生かす点から重要であるといえる。

中学年では、自分の身近な生活経験とつないで現実の問題として捉えさせ、実践する上での難しさや具体的なポイントを考えさせたい。特に、友達との関係性をテーマにしたものについては、自己を振り返りながら、よりよい仲間集団の在り方や友達とのかかわり方について考えを深めさせたい。そのためにも、中心価値として扱う「思いやり・親切」と関連価値として重要になる「信頼・友情」の視点からの事前の資料分析が欠かせない。

そして、高学年では、自らの生活や人間関係、さらには社会全体を意識させ、集団の一員、社会の一員としてどうすべきかを問うことで、「思いやり・親切」の本質に迫っていきたい。そのためにも、どの場面での何について問うのか、発問の多様な設定が重要である。

いつも同じタイプの発問でなく、ある意味で人間の弱さや醜さも踏まえながら、思いやりとは何なのかを問い返していくような場面も大切にしていきたい。

おわりに

井上・小沢（1973）は、資料を生かすことの基本に関して、「その資料の筋書きのどこの部分をどのように取り上げて、それをどのように組み合わせで話し合いにのせればねらいに迫ることができるかを、理を通して綿密にまとめる

こと」¹²⁾と指摘している。つまり、そのような授業づくりの教材研究がなければ、資料の良さや持ち味を発揮することはできない。40年前の指摘事項であるが、今の時代においても全く変わらない重要な点である。

教科化に向けた中教審答申(H26)「道徳に係る教育課程の改善等について」では、「(4)多様で効果的な道徳教育の指導方法へと改善する」の中で明記されているように、「児童一人一人がしっかりと課題に向き合い、教員や他の児童生徒との対話や討論なども行いつつ、内省し、熟慮し、自らの考えを深めていくプロセスが極めて重要」¹³⁾とされている。そのプロセスとは、児童の発達段階を見越して、授業の中での高まりをどこに置か判断し、発問や活動を組み立てていく教師の資料分析に始まっているのではないか。児童の日常よりも少し広い関係性の中で描かれている資料に出会わせ、その資料が持っているよさを生かしながら指導することで、児童のものの考え方は広がり深まっていくだろう。道徳授業の要は資料であるとも言われる。一人一人の児童が、読み物資料を通して多様な「思いやり・親切」の在り方を知り、それらへの理解を深めることで、自分らしい「思いやり・親切」を模索できるよう、児童の発達段階と照らし合わせながら、意図的に資料を活用していくべきである。

また、教師自身の思いやり・親切に関するイメージや価値観が大きく影響してくるのも当然であろう。今後、教師の価値観と資料の分析や関連する価値等の捉え方の違い等も授業づくりに大きく影響するので検討していきたい。

参考文献

- 柄本健太郎(2014)「教員養成課程の大学生が重視する内容項目とは」－教師と一般成人との比較－道徳と教育No.332 日本道徳教育学会 pp.27－38
- 菊池章夫(1988)「思いやりを科学する－向社会的行動の心理とスキル－」川島書店
- 七條正典(1985)「児童の道徳性の発達段階に応じた道徳資料の条件と活用に関する研究」鳴門教育

大学修士論文

- 永田繁雄・藤澤文他(2012)「道徳教育に関する小・中学校の教員を対象とした調査」結果報告書 東京学芸大学・「総合的道徳教育プログラム」推進本部
- 松尾直博・永田繁雄・藤澤文他(2012)「成人の道徳性と子どもの頃の体験に関する調査」結果報告書 東京学芸大学・「総合的道徳教育プログラム」推進本部
- 松岡敬興(2004)「ロールプレイを用いた共感性の育成教材による教育効果に関する研究」道徳教育方法研究10 日本道徳教育方法学会 pp.44－49
- 松岡敬興(2006)「思いやりの心を育む実践プログラムの創造とその教育効果」道徳教育方法研究12 日本道徳教育方法学会 pp.117－126
- 森岡卓也(1988)「子どもの道徳性と資料研究」明治図書
- 文部科学省 小学校学習指導要領解説道徳編 平成11年、平成20年

引用文献

- ¹⁾ 東京学芸大学・総合的道徳教育プログラム「道徳教育に関する小・中学校の教員を対象とした調査」(H24.2) pp.87－89では、以下のような資料が上位に見られる。
- 低学年:「はしの上のおおかみ」「二わのことり」「くりのみ」「ぐみの木と小とり」
- 中学年:「ないた赤おに」「絵はがきと切手」「花さき山」
- 高学年:「くずれ落ちた段ボール箱」
- 本調査で、「思いやり・親切」と同じく対象に関係なく高い順位であったのが「生命尊重」であり、次いで「基本的な生活習慣・節度・節制」「正義・公正・公平」と続く。
- ²⁾ 同上、p.62
- ³⁾ 「教員養成課程の大学生が重視する内容項目とは」－教師と一般成人との比較－ 柄本 健太郎 道徳と教育 日本道徳教育学会No.332 2014 p.34
- ⁴⁾ 植田和也・七條正典「『思いやり・親切』を扱う読み物資料に関する一考察」日本道徳教育方法学会自由研究課題発表資料、2014年、p.4
- ⁵⁾ 小学校学習指導要領解説道徳編 平成20年版、p.93

- ⁶⁾ 学研, 日本標準, 教育出版, 東京書籍, 光村図書
の5社である。他にも文溪堂等数社あるが, 平成
25年度で揃えて比較しようとした際に即座に入手
できた5社にした。
- ^{*1} 教科書会社によっては, 挿絵の色合い, 橋の上
の状況(危険性)等には描き方の違いが認めら
れる。
- ^{*2} 「親切な方へ」は, 大人である「みやこ」が, 駅
の自動販売機で前の人を取り忘れたおつりを見
つけ, 事務室に届けるというあらすじである。
見えない第三者が対象。
- ⁷⁾ 小学校学習指導要領解説道徳編 平成20年版, p.42
- ⁸⁾ 同上, p.50
- ⁹⁾ 同上, p.56
- ¹⁰⁾ 同上, p.50
- ¹¹⁾ 小学校学習指導要領解説道徳編 平成20年版, p.18
- ¹²⁾ 井上治郎・小沢宣弘(1973)「道徳の自作資料」明
治図書, p.201
- ¹³⁾ 中央教育審議会「道徳に係る教育課程の改善等
について」(答申), H26.10.21, p.11

資料：読み物資料の分析 1年生の「思いやり・親切」について示す。

《人物関係図に用いた記号》

| | | | | | |
|----|--------------|----|------------------|----|----------|
| 記号 | 意味 | 記号 | 意味 | 記号 | 意味 |
| | 主人公 | | 思いやりに基づいた行動 | | 快感情 |
| | 「思いやり・親切」の対象 | | 対象からの報酬（称賛や感謝など） | | 不快感情 |
| | 登場人物が属する集団 | | 思いやりのない行動 | | 衝突、不仲な関係 |

【第1学年】

| | 資料名 | ねらい | 主人公 | 対象 | 人物関係図 | 類型 | 内容（●あらすじ・◎主題） | P |
|------|-----------|--|-----------|----------|-------|---------------|--|-----|
| 学研 | るいくんのゴール | お年寄りや困っている人に思いやりの心をもち、親切にしようとする心情を育てる。 | るいくん（子ども） | 近所のおばあさん | | 道徳資料として作られたもの | ●友達とサッカーをしていた「るいくん」は、帰り道に近所のおばあさんが重そうな荷物を持ってゆっくり歩いている姿を見かける。るいくんは、思い切って声をかけ、荷物を持って家まで一緒に歩いて行った。おばあさんから、笑顔でお礼を言われ、何回もゴールをきめたような気持ちになる。 ◎相手が困っていることに気づいて、進んで手助けをすれば、相手も喜び、自分もよい気持ちになる。 | 3 P |
| | はしの上のおおかみ | いじわるやわがままをしないで、身近にいる弱い人に親切にしようとする心情を育てる。 | おおかみ | うさぎ・くま | | 文学 | ●一本橋を渡ろうと、おおかみは、うさぎやきつねやたぬきに対して「おれが先に渡るんだ。もどれ、もどれ。」とどなって、いばった様子が繰り返してしまふ。ある日、おおかみが橋を渡ろうとすると大きくまを見つめ、あわてて引き返そうとするが、くまは「こうすればいいのさ」とおおかみを抱き上げ、後ろにそっと下ろしてやった。おおかみは、くまの後ろ姿を見て考える。つぎの日、再び橋の上でうさぎに出会ったおおかみは、うさぎを優しく呼び止める。 ◎優しくされるとうれしい。だれに対しても優しくすると、自分もよい気持ちになる。そのような気持ちによって優しくさは広がる。 | 4 P |
| 日本標準 | くり | 友達のことを思いやる心情を養う。 | りすたろう | りすきち・りすこ | | 道徳資料として作られたもの | ●「りすきち」「りすこ」「りすたろう」がくりをとりきえている。りすきちとりすこがくりをとって、りすたろうが持っているカゴに入れていく。りすたろうは、重いカゴをがんばって家まで運んだが、りすきちとりすこは、「これは2人がとったんだから、2人で半分こにしよう」と言い出し、りすこはおこって、けんかになってしまう。 ◎自分のことばかりを考えず、相手の気持ちも考えて、なかよく分け合うことが大切である。 | 4 P |
| | うたおっ | 障がいのある人たちを身近に感じ、温かい心で接していこうとする態度を育てる。 | | | | 歌（手話） | ◎耳が不自由な人が、どのような気持ちで過ごしているかを考え、手話の必要性に気づくとともに、体の不自由な人への接し方について話し合う。 | 2 P |
| 教育出版 | あめのひ | （周りの人の気持ちを考え、行動しようとする心情を育てる。） | 動物 | 動物 | | 絵のみ | ●雨の日に、電車の中で動物たちが座っている。みんな周りの人に少しずつ迷惑をかけている。 ◎みんなの場所では、自分のことだけでなく、周りの人の様子や気持ちも考えて行動すると、互いに気持ちよく過ごすことができる。 | 2 P |
| | はしの上のおおかみ | | おおかみ | うさぎ・くま | | 道徳資料として作られたもの | ●学研と同様 ◎学研と同様 | 4 P |
| | たんぼぼ | （身近な人の気持ちを考え、温かく接していこうとする心情を育てる。） | ようこさん | お母さん・妹 | | 道徳資料として作られたもの | ●「ようこさん」は、道端でたんぼぼを見つけ、妹に見せようと1本橋んで帰った。花瓶に水を入れようとしたとき、手が滑って花瓶を落とし割ってしまう。お母さんは妹をだっこしたまま飛んできて、泣きそうなようこさんを見ると、「おねえちゃんが春をもってきてくれましたよ」と言った。 ◎相手の行為の結果だけでなく、そこに至る気持ちを考えることが大切である。 | 2 P |

| | | | | | | | | |
|------|-----------------|---------------------------------------|----------|---------------------|--|---------------|---|--------|
| 光村図書 | はおかみ はしの上の | | はおかみ | うさぎ・くま | | 道徳資料として作られたもの | ●学研と同様 ◎学研と同様 | 4 p |
| | いいかな どうしたら | (困っている人の気持ちを考えて、自分から声をかけようとする心情を育てる。) | わたし(子ども) | おばあさん 年下の子 | | 道徳資料として作られたもの | ●「わたし」が公園で友達と遊んでいたら、3才ぐらいの男の子が転んでしまった。 ●「わたし」が、お母さんと電車に乗っていたら、おばあさんが、つらそうに立っていた。 ◎困っている人に気づいたら、進んで親切にすることが大切である。 | 2 p |
| | はなのかんむり | (困っている年下の子の気持ちを考えて、やさしくしようとする心情を育てる。) | さちこ(子ども) | ちえちゃん | | 道徳資料として作られたもの | ●「さちこ」が、近所のちえちゃんの家にお使いに行くと、ちえちゃんが、お母さんがかぜのために、一人でさびしく過ごしていることに気づく。すぐに帰れなくなったさちこは、ちえちゃんを誘って一緒にレンゲ畑に行く。 ◎年下の子の気持ちを考えて、やさしくすると、互いに明るい気持ちになる。 | 4 p |
| 東京書籍 | はおかみ はしの上の | | はおかみ | うさぎ・くま | | 道徳資料として作られたもの | ●学研と同様 ◎学研と同様 | 3 p |
| | よかったね、さっちゃん | (困っている年下の子の気持ちを考えて、やさしくしようとする心情を育てる。) | ぼく(子ども) | 見知らぬ年下の子ども さっちゃん | | 道徳資料として作られたもの | ●「ぼく」は、おつかいでスーパーへ行った。入口で小さな女の子が悲しそうにしているのを見つける。帰りにも同じ様子を見かけるが、家に帰った。お母さんに女の子のことを話しているうちに、どうしても気にかかり、もう一度スーパーへ行ってみると、女の子がいて、迷子になっていることが分かる。泣き出す女の子を励まし、一緒にしりとりをして待つことにする。やがて、さっちゃんのお母さんが現れ、ぼくは「よかったね」と安心する。 ◎困っている年下の子の気持ちを考え、そばに行き、励ますことで、自分も相手もあたたかい気持ちになる。 | 3 p |
| | ぼくのはな さいたいけど | (弱い立場の相手の気持ちを考え、やさしくしようとする心情を育てる。) | こへま(トト) | もへら(モイラ) | | 文学 | ●トトは、おかあさんの誕生日に花束を贈るために花畑を作った。ところが、やっとなった花が、少しずつ減っている。モイラが病氣のお母さんを喜ばせようとしていたことが分かる。かわいそうに思ったトトは、そのまま花をあげる。誕生日の日、トトが花畑に行くとき花は2つ。モイラの顔が浮かんで1つを残して帰る。しかし、花を贈る時に悲しくなり、お母さんに1本になったわけを話すと、お母さんは「あなたのおかげで二人のお母さんが喜んだ。ありがとう」と喜んだ。 ◎相手を大切に思うやさしい心が、どのような物よりも尊い。 | 4 p |